

建築研究協会の礎を築いた先人達を偲んで

理事 金夢 潔

(財)建築研究協会が1955年1月に設立されてから今日まで約半世紀が経過した。当初、所員の指導に当たられたのは京都大学建築学科教授であった坂 静雄、森田慶一、村田治郎、棚橋 諒、前田敏男の5人の先生方であった。

坂先生は鉄筋コンクリート構造学の世界的権威であり、京大農学部の建物をはじめ数々の構造設計を担当されたほか、平安神宮大鳥居の設計や奈良東大寺南大門の構造補強も手掛けられた。昭和10年代の後半に、伝統的木造伽藍建築では地震時に振動する柱の傾斜角が、ある範囲までは、架構に大きな復元力を与えることを理論的に研究された。その成果は現在、わが国の文化財建造物の耐震設計理論の基礎となっている。

村田先生は建築史、特に日本建築史と東洋建築史がご専門で、中国古代の「居庸関」に関する研究により学士院賞を受賞されたことで有名である。当協会の設立代表者であり、また理事長として永い間協会の発展のために尽力された。また京大建築学科では現理事長の川上 貢先生をはじめ大森健二先生、山田幸一先生など多くの建築史学者を育てられた。

棚橋先生は耐震設計学、鉄骨構造学、建築施工がご専門であったが、意匠設計にも手腕を発揮され、昭和18年鳥取地震の後の復興事業に協力、鳥取市内外で沢山の耐震建築を設計された。協会設立後は病院建築の設計を多く手掛けられ、国立岡山病院や京都鞍馬口病院、大阪府の池田市民病院などの作品を残しておられる。また、京都タワーの構造設計も指導され、永年、当協会の常務理事も務められた。

前田先生のご専門分野は、建築の計画原論で、光、熱、音響が建築設計を進める上で常に基本になることから、これらの理論的研究を地道に指導された。協会活動についても側面から支援していただき、村田先生の後任の理事長職を永く務められた。

前田先生の後に堀内三郎先生が理事長に就任された。先生は若い頃、自治省消防研究所におられ、建築物火災のメカニズムと消火方法に関する権威であった。協会が担当した数多くの木造社寺建築の防災計画を立案する上で、貴重な助言をされている。

前常務理事大森健二先生については本誌第1号に紹介されているので、参照願いたい。

最後に、山田幸一先生について触れておきたい。先生も村田先生の薫陶を受けた建築史学者だったが、家業、左官店の当主でもあった。日本建築の土壁の施工技術の権威者として桂離宮の赤土壁や西本願寺阿弥陀堂の白壁の改修に際して、現場で懇切丁寧に指導され、当協会の「日本建築研究部門」の礎を築いてこられた。

今日の建築研究協会の成長ぶりを見るにつけ、これら先人達のご功績を偲び、感謝の意を覚えるものである。